

2024 年秋の講演会 講演要旨

タイトル: 近づく戦争の足音とメディアの役割 **講師: 望月衣塑子**

望月さんは始めに、自身の著作『新聞記者』を原作とする同名タイトルの映画、そして彼女の取材実態を森達也監督が追った『i-新聞記者ドキュメント』、さらに安倍晋三元首相とその祖父である岸信介元首相を描いたドキュメンタリー『妖怪の孫』の3本の映画の予告編をプロジェクターに映し出した。どの作品も政権批判の色合いが強いことから製作は難航し、特に『新聞記者』については、「芸能活動に支障が出るかもしれない」といった理由から多くの芸能事務所に断られた逸話などを紹介した。

続いて、トランプ氏が大統領選で勝利したことに触れ、日米地位協定が改定されてさらに日本に不利なものになる可能性を示唆。先行きは不透明ながらも、国政、内政、外交も変えていくためには、結局のところ政権交代という方向に向かっていかなければならないと持論を展開した。

その後は、台湾有事を想定した軍拡路線について、諸外国との軍事演習の強化、国民生活そっちのけでの防衛費の増大、全国でみられるミサイル配備の急加速などを紹介。防衛予算の前倒しで無尽蔵に膨らむ防衛予算について「将来の子どもや孫に大きなツケを残す」と警鐘を鳴らした。

本題であるメディアの状況については、大手マスコミのトップが防衛力強化に向けた有識者会合に参加して軍拡を推奨していると報告。軍拡の必要性を政府が大新聞に書かせ、それを政府が肯定していくという流れができていることを問題視した。

そしてメディアの役割について、前回（2018年）は「メディアの役割とは、戦争したい人たちや政府が隠そうとしていることを明るみにすることと話したが、現在は読売、朝日、日経のトップが堂々と戦争するぞと言っているのが現状。いまメディアの役割とは戦争をしたい人たちにとにかく戦争をさせないこと」と語った。

改憲の動きについては、すぐに動き出すことはないだろうとしながらも、9条に自衛隊を明記する声などがあり油断はできない。憲法とは、彼ら支配者の暴走を防ぐためにある。交戦権を否認する第2項が無力化されれば、いずれは徴兵の義務化につながる。メディアと市民が手を取って対抗しなくてはならないと会場に訴えた。

最後に、9条2項を提唱した幣原喜重郎首相と、マハトマ・ガンジーの言葉を紹介し、講演を終えた。